

ゴーゴリの『鼻』における「呪術治療」と「聖体礼儀」の両義性

Амбивалентность знахарства и Божественной литургии в
повести Н.В. Гоголя «Нос»

井上 幸義
INOUE Yukiyoshi

Пронизанный украинским колоритом цикл повестей Н.В. Гоголя «Вечера на хуторе близ Диканьки», густо населен колдунами, ведьмами, чертями и тому подобной нечистью. Но и в повести «Нос», действие которой происходит в Петербурге, также присутствуют мотивы не только знахарства, но и Божественной литургии, хотя и в более завуалированной форме. Например, образ доктора, принявшего Ковалева, может ассоциироваться с образом знахаря, Пузатым Пацком, из повести «Ночь перед Рождеством». А в повести «Нос», как замечает М. Я. Вайскопф, можно отметить аллюзию на Божественную литургию, совершаемую цирюльником Иваном Яковлевичем. В настоящей статье сделана попытка показать, что в повести «Нос» амбивалентность знахарского ритуала, совершаемого сверхсовременным доктором, перекликается с двойственностью Божественной литургии, проводимой невежественным цирюльником. Амбивалентность этих двух ритуалов, проводимых в столице, может ассоциироваться с двойственным образом Санкт-Петербурга, «городом пышным и городом бедным». Это помогает ввести читателей в фантастический мир Петербурга.

0. はじめに

ニコライ・ゴーゴリ（Н.В. Гоголь）の小説のうち、ウクライナを題材とする一連の作品、例えば、『ディカニカ近郊夜話』（「Вечера на хуторе близ Диканьки」）には、妖術師（колдун）や、魔女（ведьма）、悪魔（чёрт）などの不浄な存在（нечисть）が至るところに顔を出し、同作中の一編『降

誕祭の前夜』(Ночь перед Рождеством)の登場人物「太鼓腹のパツューク(Пузатый Пацюк)」は、ロシアの伝統的民間医療である呪術治療(знахарство)によって村人の病気を治してしまう呪術治療師(знахарь)として描かれている。一方、ペテルブルクを舞台として物語が展開する中編小説『鼻』(Нос)にも、暗示的な表現ではあるが、医者による呪術治療を連想させる場面や、鼻を発見する床屋が行う聖体礼儀の引喩を見ることができる。超近代的な医者によって行われる非近代的な呪術治療という両義性と、その反対に、無知で俗なる床屋による神聖な聖体礼儀という両義性は、互いに呼応し合い、このふたつの両義性が、帝国の中心たる首都でありながら同時に帝国の辺境に置かれたペテルブルクという都市の両義性を連想させ、そのことがペテルブルクの幻想性を一層際立たせていることを本稿では明らかにする¹。

1. 太鼓腹のパツュークと『鼻』の医者による呪術治療

呪術治療師(знахарь)は、ロシアやウクライナの村の伝統的な民間治療師で、人間だけでなく家畜の治療も行う。「呪術治療師は、妖術師(колдун)と異なり、不浄な力(нечистая сила)の助けに頼ることなく、人に害を与えることもないが、自らの活動は必ず秘密のベールで覆われなければならないとし、治療を受ける者も秘密を守らなければならない。ごくわずかの治療費で、患者に対してささやき声で呪文(заговор)を唱えることにより治療を行うため、彼らは『ささやく者(шептун)』と呼ばれることもある(...)呪文は、治療手段(ほとんどの場合、薬草)と同様、口伝えによって呪術治療師から呪術治療師へと伝えられるか、あるいは、膨大な手書きの『花書』(цветник)や『本草書』(травник)や医療手引書(лечебник)、また公に出版された薬草に関する手引書などに記述される」[Беловинский: С. 262]。

ゴーゴリの全作品中で唯一それと明示されている呪術治療師(знахарь)

1 本稿は、2012年3月30日から4月1日までモスクワのゴーゴリ博物館で開催された第12回ゴーゴリ学会「ゴーゴリと伝統的スラヴ文化」(Двенадцатые Гоголевские чтения «Н.В. Гоголь и традиционная славянская культура»)での口頭発表「Знахарство, литургия и ритмика в повести «Нос»」に加筆訂正したものである。

は、「太鼓腹のパツユーク」である。パツユークは、病人を治療する本物の呪術治療師でありながら悪魔的な雰囲気を漂わせる両義的な存在として描かれている。

Не прошло нескольких дней после прибытия его в село, как все уже узнали, что он знахарь. (彼 (パツユーク) が村に来てから数日も経たないうちに、彼が呪術治療師であることは誰もがすでに知っていた) Бывал ли кто болен чем, тотчас призывал Пацюка; а Пацюку стоило только пошептать несколько слов, и недуг как будто рукою снимался. (だれかが何かの病気になるたびに、すぐにパツユークが呼ばれ、パツユークがひとことふたことささやくだけで、病はまるで手で払われたように消えてしまうのだった)

Ты, говорят, (...) - приходишься немного сродни черту. (噂じゃおまえさん (パツユーク)、(...) いくらか悪魔の親戚筋だってね)

ユーリー・マン (Ю. В. Манн) は、ゴーゴリが描く魔物 (чертовщина) が「悪魔的なものと人間的なものとの明示的な類似性や半分隠された類似性に基づいて構築されている」ことを指摘している [Манн: С. 23]。呪術治療師のパツユークには、このような悪魔的なものと人間的なものとの半分隠された類似性という両義的な形象が認められると言えるだろう。²

一方、『鼻』において8等官コヴァリョフを診察した医者に関し、オリガ・ディラクトールスカヤ (О. Г. Дилакторская) は、この人物像が、呪術治療師の形象とコミカルに関係付けられているとし、その理由として、彼の治療法が、「病気を驚かせる手法」、つまり、「病人を叩くこと」を手法のひとつとする民間医療のやり方に即していること、医者が「無欲」であるというモチーフが、民間伝承による呪術治療のモチーフに通ずるもので

2 そもそも、ロシアの民間信仰では、悪魔 (чёрт) や魔女 (ведьма) は、ヨーロッパにおけるそれと異なり、恐ろしさよりコミカルさが勝っている存在であり、悪意より善意が勝っている。妖術師 (колдун) や魔女は、ロシア人のイメージでは、普通の人々であり、一般の人々に混じて生活している。村ではだれもが、その存在を知っており、村の人々は、困った時には、妖術師や魔女たちに協力や助言をもとめることさえある [Будур: С. 26]。東方正教会は、悪魔との闘いを自らの使命とはみなしてこなかったために、デモノロジーは、しかるべく集大成されたものとしては発達することがなかったばかりか、18世紀末まで一般大衆のイメージには存在しなかった。妖術に対する民衆の見方は、デモノロジー的ではなく、汎神論的であった [Там же: С. 18]。もっとも、ロシア正教会は、白呪術も黒呪術も、一切の呪術は神にそむくものとみなしている。

あることを挙げている [Дилакторская:160-161]。実際、『鼻』では、コヴァリョフの鼻を発見した警察分署長がコヴァリョフに鼻を渡す際に賄賂を要求するのに対し、診察した医者には、賄賂を求めることも、治療費を受け取ることもなく立ち去るし、また、治療の際には、コヴァリョフの鼻がもともとあった場所を親指で2度も「弾いて」、その度にコヴァリョフの頭をのけ反らせている。ディラクトールスカヤの指摘以外にも、この医者への歯磨きに対する異常なまでのこだわりも呪術医療を連想させる。医者は、毎朝ほとんど四分の三時間 (45 分間) 口を漱ぎ、なんと5種類の歯ブラシで、しかも歯を磨くどころが「研磨して (шлифую)」まで口内を清潔に保つ努力を怠らないのだが、呪術治療師の歯についてナタリヤ・ブドゥル (Будур Н.В.) が記しているように「呪術治療師は、必ずすべての歯がそろっていないなければならない。さもないと、呪文の力が失われてしまうのである」 [Будур: С. 200]。とすれば、医者への潔癖症はそのためであると解釈することができる。以上から、この医者も、呪術治療師の半分隠された形象であると解釈することが可能であろう。このことをさらに実証するために、医者の行動様式や使用される語彙などを、本物の呪術治療師として描かれている太鼓腹のパツュークのそれと比較対照してみよう。

表に示したように、パツュークと医者の間には行動様式そのものだけでなく、このふたりの行動を描写する語彙の選択や反復語法においても多くの共通点が見られる。パツュークは、治療で「ひとことふたことささやき (пошептать несколько слов)」、一方、医者は「大声でも小声でもないが、催眠術をかけるような声で言う (сказал ни громким, ни тихим голосом,... магнетическим)」。ロシア語の магнетический という形容詞には、「磁気の」という意味や、そこから転じて「魅惑的な」という意味の他に、магнетизм (動物磁気) から派生した「動物磁気の」「催眠術の」という意味がある³。ここでゴーゴリは、「魅惑的な声」という表の意味の裏に「催

3 『鼻』には動物磁気にまつわるくだりがある。「当時は、人の心が極端なものになびき、つい最近も、動物磁気 (магнетизм) の作用の実験が世間を虜にしたばかりであった」。動物磁気とは、ウィーンの医師フランツ・メスネル (1733 ~ 1815 年) が唱えた「動物磁気説」のことで、人体の中には両極の磁気があり、その磁気分布が乱れると病気になるというもの。その治療法は、催眠によるもので、催眠研究の先駆けと言われる。ロシアでは、『鼻』が書かれる10 数年前の1820 年代末にペテルブルクで催眠術治療師のアンナ・トルチャーニノヴァが眼力による動物磁気の催眠実験を行い、その噂は、特に上流階級の人々の間でもちきりとなり、プーシキンも大いに関心を示した。

太鼓腹のバツユーク	医者
行動様式の類似点	
<p>умел так искусно <u>ударить кулаком в спину</u>, что кость отправлялась куда ей следует (実に巧みに拳骨で背中にひと叩きくらわせたものだから、喉に引っかかった骨はしかるべきところへちゃんと送られたのだった)</p> <p>стоило только <u>пошептать несколько слов</u>, и недуг как будто рукою снимался (ひとことふたことささやくだけで、病はまるで手で払われたように消えてしまうのだった)</p>	<p><u>дал ему большим пальцем щелчка</u> в то самое место, где прежде был нос (以前鼻があったちよどそのあたりに親指でひと弾きくらわせた)</p> <p><u>сказал ни громким, ни тихим голосом</u>, но чрезвычайно уветливым и <u>магнетическим</u> (大声でも小声でもないが、著しく説得力に富み催眠術をかけるような声で言った)</p>
使用される語彙や反復語法における類似点	
<p>спал <u>три четверти</u> дня, <u>ел</u> за шестерых косарей (一日の四分の三を眠って過ごし、草刈り人の六人分も<u>食べていた</u>)</p> <p><u>разинул рот</u>; поглядел на вареники и <u>еще сильнее разинул рот</u>. <...> съел и снова <u>разинул рот</u> (口をぱくりと開けると、カテージチーズ入りピロシキを睨みつけ、<u>さらに口を大きく開けた</u>... そいつを食べてしまうと、<u>またもや口をぱくりと開けた</u>)</p>	<p><u>ел</u> поутру свежие яблоки<...>, полоща его (рот) каждое утро почти <u>три четверти</u> часа (朝は新鮮なりんごを何個か<u>食べ</u>... 毎朝ほとんど<u>四分の三</u>時間口を漱ぎ)</p> <p><u>велел ему перегнуть голову</u> сначала <u>на правую сторону</u> и <...> <u>сказал: «Гм!»</u> Потом <u>велел ему перегнуть голову на левую сторону</u> и <u>сказал: «Гм!»</u> (彼(コヴァリョフ)に<u>頭をまず右側に曲げるように命じ</u>... 「ふへん」と<u>唸った</u>。次に<u>頭を左側に曲げるように命じ</u>、また「ふへん」と<u>唸った</u>)</p>

眠術の」という意味を込めているのだろう。呪術治療師の主な治療法のひとつは「ささやく(нашептывание)」であり、そのため、上述したように、彼らは「ささやく者(шептуны)」と呼ばれる。呪術治療師が治療の対象にささやくのは、その対象を催眠状態化(магнетизация)させるためであり、

医者の「催眠術をかけるような声」は、この催眠状態化を連想させる。また、医者が立ち去る場面で、コヴァリョフが「深い無感覚の状態 (в глубокой бесчувственности)」にあったというのも、医者「催眠術をかけるような声」の結果と考えることができるだろう。

ここで興味深いのは、この「深い無感覚の状態」のコヴァリョフの目に入ってきたものが、「黒い燕尾服の袖口から覗いていた、雪のように白い清潔なシャツの、袖口の折り返しだけ (下線は引用者)」であったという点である。ここでは、黒と白という色が対比されている。呪文にも白と黒の2種類があり、「ひとつは、『白呪文 (белые заговоры)』、すなわち、病や災厄から救うことを目的とし、祈りの要素を含む呪術治療であり、もうひとつは、『黒呪文 (черные заговоры)』、すなわち、患いや害悪をもたらすことを目的とし、祈りの言葉なしに行われる、悪霊と結びついた妖術 (колдовство) である」[Русское народное поэтическое творчество: С. 7]。その一方で、ヴラディーミル・ダリ (Даль В.И.) が説くように、呪文の内には「霊的な観念と俗的な観念の混合」を見ることができるし、呪文そのものは「黒きものと白きものとの、闇と光との混合物」[Даль: С.25]である。すなわち、呪文とは、本質的に、黒きものでありながら、同時に白きものであるという両義的な性格を多かれ少なかれ有するものと言うことができるであろう。その意味で、「黒い燕尾服」と「白くて清潔なワイシャツ」を身にまとった医者形象は、この「黒きものと白きものとの混合物」を連想させる両義的な存在である。さらに興味深いのは、これらの語を含むフレーズが一定のリズムを有していることである。

«видел только выглядывавшие из рукавов его

черного фрака рукавчики белой и чистой, как снег, рубашки».

_ U U _ U U _ U U _ U U _ U U | U U _ U ダクティリ (強・弱・弱格)

(目に入ってきたのは、ただ、

黒い燕尾服の袖口から覗いていた、雪のように白い清潔なシャツの、
袖口の折り返しだけだった)

このフレーズは、音のレベルでは、子音 [p] と [k] の反復と母音 [и] と [a] の反復、「рукавчики」(袖口) と «рубашки» (シャツ) との共鳴、リズム

ムのレベルではダクティリ（強・弱・弱格）が明白であり、このような強烈なリズム・音的表現力は、このフレーズを呪術治療師の呪文のように響かせる。つまり、このフレーズは、意味的には、呪術治療師としての医者
の両義性を暗示し、リズム・音的には、呪文を連想させるものである。一般的に、呪文は一定のリズムや音の共鳴を特徴としている。以下に、呪術治療の一例として、不眠治療の呪文⁴を見てみよう。

– Ночная ночнужка,	U _ U U _ U
Вот тебе игрушка,	U U _ U _ U
День и ночь играй,	U U U U _
А младенца (имя)	U U _ U
Со сна не сбивай.	U U _ U _
Как эти постилки лежат и молчат,	U _ U U _ U U _ U U _
Так и раба Божья (имя) лежит и молчит.	

(夜の寝間着さん、
ほら、おもちゃをどうぞ、
昼も夜も遊びなさい、
でも幼子（幼子の名前）は
夢から覚まさないで。
敷布団が横に敷かれて黙っているように、
神の女僕（幼子の名前）も横になって黙っているのだから。)

この呪文では、不眠症が「夜の寝間着」に喩えられ、おもちゃを与えるから寝ている者を邪魔をしないようにと語りかけられている。音の点からは、[и]の母音反復、「лежать」（横たわる）と«молчать»（黙っている）の語反復、「-ушка」と«-ай»の脚韻、「ночн-»と«-ак»の反復、リズムの点からは、アンフィブラーハイ（弱・強・弱格）とアナペスト（弱・弱・強格）が観察される。また、子音 [ж] [ч] [ш] の、いわゆるシュー音（шипящие согласные）が反復されることによって、夜の寝間着に対して「しーっと

4 Традиционный фольклор Новгородской области. Сказки. Легенды. Предания. Былички. Заговоры (по записям 1963-1999 г.). より。ノヴゴロド州で採集された、不眠治療のための呪文の一例。

静かにさせる (шипеть)」というオノマトペの効果も得られている。

このように、『鼻』の医者「黒い燕尾服の袖口から覗いていた、雪のように白い清潔なシャツ」というフレーズと治療の呪文には、リズムや語の共鳴という類似性を見出すことができる。

ここで再び表に戻ろう。パツュークと医者¹の動作を表すのに「四分の三 (три четверти)」と「食べた (ел)」という同じ語句が使用されており、また、語反復の手法も共通している。つまり、パツュークは「口を開ける (разинул рот)」動作を3回くり返し、医者はコヴァリョフに「頭を曲げるよう命じてから、「ふ～ん」と唸る (велел Ковалеву перегнуть голову и сказал: «Гм!»)」一連の動作を2回くり返している。このような語反復も、同様に語反復を特徴とする呪文を連想させるものである。

その一方で、パツュークと医者¹の間には、行動様式や性格の本質において差異もある。たとえば、同じ「四分の三」と「食べた」というふたつの語句を使用しながら、まったく異なるふたりの形象が対比されている。つまり、パツュークは「一日の四分の三分を眠って過ごし、草刈り人の六人分も食べていた」というカーニヴァル化された形象であるのに対し、医者は「朝は新鮮なリンゴを何個か食べ... 毎朝ほとんど四分の三時間口を漱いでいた」という超近代的で厳格主義的な形象なのである。ユーリイ・マンが指摘しているように「ゴゴリの悪魔やその近縁や遠縁一族の中でもっともカーニヴァル化された形象はパツュークである」[Манн: С. 23]。パツュークのカーニヴァル化された形象は、語反復によってさらに強調されている。「パツュークは「口を大きく開き (разинул рот)、カッターチェーン入りピロシキに目をやると、さらに大きく口を大きく開き (разинул рот)、食べてしまうとまた再び口を大きく開いた (разинул рот)」」。ユーリイ・マンは「カーニヴァルやカーニヴァルと結びついた芸術の諸形態には、大きく開かれた口のモチーフ、つまり常に食料をむさぼり食ってやろうと構えているというモチーフが認められる」と述べている[Манн: С. 23-24]。一方、『鼻』の医者にとって、口は「尋常ならざるほど清潔に保っておかなければならない (держат в необыкновенной чистоте)」ものである。悪魔の親戚筋であるパツュークの形象の根底に、悪魔的なものと人間的なものとの半分隠された類似性があるとすれば、医者の形象の基にあるのは、悪魔的なものと人間的なものとのほとんど隠された類似性であろう。医者

の厳格主義的な潔癖症を強調する文には、口内を清潔に保ち歯を磨くどころか研磨する過程を再現する音象徴が秘められている。

Доктор этот <...> держал рот в необыкновенной *чистоте*, полоща его каждое утро почти три четверти часа и шлифуя зубы пятью разных родов щеточками (この医者は (...) 毎朝ほとんど四分の三時間口を漱ぎ、また5種類の歯ブラシで歯を研磨しては、口内を並はずれて清潔に保っていた)

上述の「ほとんど四分の三時間 (почти три четверти часа)」という語結合には、子音の [ч], [с], [т] の他、母音の [и] や弱母音の [о] や [а] も含まれており、これらの音を組み合わせると「чистота」(清潔さ) という語が形成される。つまり、この語結合には、「清潔さ」を象徴するオノマトペが込められているのである。また、これに続く句の「5種類の歯ブラシで歯を研磨しては (шлифуя зубы пятью разных родов щеточками)」でも、シュー音の [ш], [щ], [ч] や歯擦音の [з] が、歯を研磨するときに生じる音をオノマトペとして再現している。このように、歯磨きにまつわるこの一文には、音と意味、すなわち「シニフィアン (記号表現) と「シニフィエ (記号内容)」の見事な一致が見られるのである。さらに、シュー音や歯擦音の子音反復は、呪文が唱えられるときのささやき声を連想させる。

以上から、医者は、パツューク同様、呪術治療師であり、パツュークが呪術治療師の明示的形象であるとすれば、医者 of そのそれは半分隠された形象である。また、その形象の基にあるのは、悪魔的なものと人間的なものほとんど隠された類似性であると言えるだろう。医者 of このエピソードでは、超近代的な医者によって行われる非近代的な呪術治療という両義性がモチーフとなっている。

2. 中編小説『鼻』における聖体礼儀と床屋の動作のリズム

『鼻』には、明示的ではないが、超近代的な医者・呪術治療師によって行われる儀式という両義性のモチーフだけでなく、俗的で無知な床屋によって執り行われる神聖な聖体礼儀という両義性のモチーフも込められている。ミハイル・ヴァイスコフ (Вайскопф М.Я.) は、8等官コ

ヴァリョフの鼻が失踪する旧暦（ユリウス暦）の3月25日が、ロシア正教の十二大祭のひとつ「生神女福音祭」（受胎告知にあたる）の引喩であり、床屋のイヴァン・ヤーコヴレヴィチが食卓で行う一連の動作が、生神女福音祭の朝から行われる「聖体礼儀」（Божественная Литургия）の第一部である「奉献礼儀」（Проскомидия）の儀式そのものであるとしている [Вайскопф: 323-329]。聖体礼儀とは、正教で最も中心的な奉神礼（ミサ）で、キリストの血と体である御聖体（パンとぶどう酒）をいただく儀礼のことであり、奉献礼儀では、司祭と輔祭が祭服に正装し、聖パンとぶどう酒を用意し、聖パンをナイフで切って真ん中の一部を取り出し、信者に分け与える準備をする。ヴァイスコフは、イヴァン・ヤーコヴレヴィチの振る舞いが、いくつかの点で、ゴーゴリ自身が一般大衆のために祈祷・儀式の意味を明らかにしようとした未完の啓蒙書『聖体礼儀考』（Размышления о Божественной Литургии）⁵に記された儀礼と一致するとしてそれぞれの引用文を対照している。

『鼻』：Иван Яковлевич для приличия надел сверх рубашки фрак.

（イヴァン・ヤーコヴレヴィチは礼儀上シャツの上から燕尾服を着込んだ）

『聖体礼儀考』：Священник и диакон приступают к облачению себя в священные одежды.

（司祭と輔祭は祭服を完装しにかかる）

『鼻』：Разрезавши хлеб на две половины, он поглядел в середину и <...> вытащил – нос!

（パンを半分に切り分け、真ん中をのぞき込むと（中略）ひっぱり出した— 鼻だ！）

『聖体礼儀考』：Священник крестовидно надрезает хлеб «и приподъ-емлет потом <...> вырезанную средину».

5 ゴーゴリは、1836年の『鼻』の出版の後、1843年から1844年頃『聖体礼儀考』の構想を練り、匿名で出版するつもりだったようだが果たせず、その死後原稿が発見され、1857年に出版された。『聖体礼儀考』は、ソ連時代には宗教的文書であるという理由から科学アカデミー版のゴーゴリ全集（1937～1952年）にも収録されず、ソ連邦崩壊直前の1990年によく Современник 社からリプリント版が出されると、同年、雑誌「Наше наследие」の第5号にも掲載された。

(司祭は聖パンに十字型の切れ目を入れ(中略)切り出された真ん中を聖戈(両刃のナイフ)で持上げる)

ヴァイスコプフが指摘している箇所以外にも、例えば、「взял в руки нож и, сделавши значительную мину, принялся резать хлеб»(ナイフを手にとると、意味ありげな顔つきでパンを切りにかかった)というくだりは、日常の単なる食事には大げさであり、この儀式の神聖さを暗示していると考えられる。また、『鼻』の書かれた19世紀前半では、役人以外の職業の人々の仕事着兼普段着はフロックコートが一般的であり⁶、燕尾服を着るのは不自然でおおげさであった。普段着として燕尾服を身にまとうイヴァン・ヤーコヴレヴィチが、「никогда не ходил в сюртуке»(一度もフロックコートを着たことがなかった)という断り書きも、この儀礼性を裏付けている。また、「для приличия»(礼儀上)燕尾服を着込んだとは、誰に対する礼儀なのか。一見すると、尻に敷かれている妻に対してと読めるが、これも祭服を完装するという聖体礼儀の引喩と二重の意味を含ませて、笑いと神聖さとのずれを際立たせることによってこれから起こる事件の幻想性を予感させているのだろう[井上: 220-233]。以上から、この一連の動作が聖体礼儀、とりわけ奉獻礼儀の引喩であることは明らかである。

ここで、床屋のイヴァン・ヤーコヴレヴィチが執り行なう聖体礼儀での、彼の動作を描写している文のリズムを考察してみよう。聖体礼儀を行うに当たり、イヴァン・ヤーコヴレヴィチは、「ナイフを手にとると、意味ありげな顔つきでパンを切りにかかった(взял в руки нож и, сделавши значительную мину, принялся резать хлеб)」。この句には一定のリズムが含まれている。

«взял в руки нож и, сделавши значительную мину, принялся резать хлеб»

U _ |UU || U _ |UU || U _ |UU || U _ |UU || U _ |UU

ヤンブ+ピリーヒイ

6 エнциклопедический словарь российской жизни и истории XVIII – начало XX в., С. 770によれば、18世紀から20世紀初頭にかけて、ロシアのサービス業に従事する人たちの仕事着兼普段着はフロックコートであった。

ここでは、リズムのレベルでヤンプ（弱・強格）とピリーヒイ（弱・弱格）の組み合わせが4回も反復され、また、音のレベルで母音 [u] の反復、シュー音 [ш] [ч] と歯擦音 [з] の反復が見られる。このようなリズムと音の規則性は、聖体礼儀の儀式的性格を象徴すると同時に、儀式の荘厳さを強調するだけでなく、俗で無知蒙昧な床屋によって執り行われるという両義性をも際立たせている。一方、前述のように、医者歯磨きの場面（「5種類の歯ブラシで歯を研磨しては（шлифую зубы пятью разных родов щеточками）」でも、シュー音の [ш], [ш], [ч] や歯擦音の [з] が、歯を研磨するときに生じる音をオノマトペ的に再現し、同時に、シュー音や歯擦音の子音反復は、呪文が唱えられるときのささやき声を連想させていた。

以上から、「黒い燕尾服」と「白いシャツ」の超近代的な医者によって行われる非近代的呪術治療は、無知で俗なる床屋による神聖な聖体礼儀と、両義性という意味においてもリズム・音のレベルにおいても互いに呼応し合っている。ここで注目すべきは、『鼻』の最初の自筆完成原稿には、医者にまつわるエピソードはまだなかったという点である。ゴーゴリは、『現代人』のテキストではじめてこのエピソードを挿入した。それにより、互いに正反対のふたつの儀式が、対比されることになり、作品の構成上も歯車の凹凸のようにぴたりと噛み合ったわけである。そして、ペテルブルクで執り行われるこのふたつの儀式の両義性は、帝国の政治的文化的中心たる首都でありながら同時に帝国の辺境に置かれたペテルブルクという都市の両義性、「絢爛な都市にして衰れな都市よ」⁷ とプーシキンが詠った人工都市ペテルブルクそのものの両義性を連想させる。

次に、『鼻』の冒頭の一文を考察してみよう。この文は、通常の語順と

7 プーシキンが、1828年にペテルブルクを去りマリニンキに向かう折に、アンナ・オレーニナに捧げた詩で、両義的なイメージのペテルブルクと麗しき女性のイメージが対比されている。冒頭の一行は、19世紀から20世紀初頭のロシア文学において形成された、いわゆる「ペテルブルク神話」のキーワードとなった。

Город пышный, город бедный,	(絢爛な都市にして衰れな都市よ、
Дух неволи, стройный вид,	束縛の精神にして端正な姿よ、
Свод небес зелено-бледный,	緑がかりし青白き天空のドームにして
Скука, холод и гранит —	わびしさ、寒さ、そして御影石よ —
Все же мне вас жаль немножко,	それでも私には少しばかり汝が衰れなのだ、
Потому что здесь порой	というのもここでは折々に
Ходит маленькая ножка,	小さな御み足がそこかしこ歩み、
Вьется локон золотой.	金色の巻き毛がなびいているのだから)

異なる部分的な倒置語順をとっているために、奇妙で幻想的に響き、鼻失踪事件が起こったペテルブルクという都市の幻想性と両義性を象徴していると考えられるからである。

3. 『鼻』の冒頭の一文に隠されたペテルブルクの両義性

『鼻』の冒頭の事件の日付は、いく度かの変遷を経て最終的に 1842 年の『ゴーゴリ作品集 (Сочинения Николая Гоголя)』で 3 月 25 日が選択された。この一文をリズムと音の点から分析してみよう。

Мárта 25 числá

(*Мáрта двáдцать пýтого числá*)

случи́лось в Пете́рбурге необыкновенно-стрáнное происше́ствие.

_U|_U|_U|UU|_||

5 脚ホレイ (強・弱格)

U_|UU|U_|UU|UU|U_|U_|UU|UU|_UU 10 脚ヤンプ (弱・強格)

(3 月 25 日に奇怪このうえない事件がペテルブルクで発生した。)

この文は、次のようにきわめて大きな音の表現力をもっている。

第一に、ふたつのシンタグマのリズムが、ホレイ (強・弱格) とヤンプ (弱・強格) とで対立している。どちらも 2 音節の韻律の対立は、ふたつのシンタグマのリズムの衝突を引き起こし、事件の日付を強調することになり、読み手、すなわち朗読する聴き手に緊張感を呼び起こす。

第二に、「*Мáрта двáдцать пýтого числá*» (3 月 25 日に) は、それぞれの語の強音節がいずれもソノリティーの大きな [a][ja] 音の母音反復であるために、ホレイのリズムにさらに大きな音の表現力が与えられている。

第三に、「*пýтого числá случи́лось в Пете́рбурге*» の語句は、[n][t]+[ç]+[c][n] と [c][n]+[ç]+[n][t] という 3 組の鏡像の組み合わせでくり返された子音反復であり、この子音反復が、[a][ja] 音の母音反復を強調している。換言すれば、母音反復と子音反復が実に巧に融合することによって極めて大きな情動的表現的ニュアンスがこの文に付与されているのである。

ここで注目すべきは、部分的な倒置語順である。この文は、「*Мáрта двáдцать пýтого числá*» (3 月 25 日に)、「*случи́лось*» (発生した)、「*в Пете́рбурге*» (ペテルブルクで)、「*необыкновенно стрáнное происше́ствие*» (奇怪このうえない事

件が) という語順をとっている。統語論的に言えば、最初に時間の状況限定詞 (детерминант)、次に述語、次に場所の状況語、最後に主語という語順がとられているのだが、すでに拙稿で論述しているように [井上: 227-229]、この最初の一文は、いわゆる小説の巻頭文であり、この語順は一般的な巻頭文とは異なる特徴的な語順 (部分的な倒置) をとっているのである。巻頭文は、小説の出だしであるので、一般的に文脈がない文であり、ロシア語では、通常、状況限定詞を含む文脈非依存型不分割文 (контекстуально независимые и коммуникативно нерасчлененные предложения) となる。科学アカデミーの 80 年版『ロシア語文法』《Русская грамматика》が規定しているように、状況限定詞を含む文脈非依存型不分割文の一般的な中立語順は、「状況限定詞グループ+述語グループ+主語グループ」である [Русская грамматика: 197-198]。この規定にしたがえば、『鼻』の巻頭文のしかるべき中立語順は、最初に時間の状況限定詞《Марта двадцать пятого числа》(3月25日に)、次に場所の状況語《в Петербурге》(ペテルブルクで)、次に述語《случилось》(発生した)、最後に主語《необыкновенно странное происшествие》(奇怪このうえない事件が) という語順をとるはずである。すなわち、

«Марта двадцать пятого числа в Петербурге случилось необыкновенно странное происшествие»

(3月25日にペテルブルクで奇怪このうえない事件が発生した) という文になるはずである。では、なぜゴーゴリは、この中立語順をとらなかったのであろうか。なぜ、部分倒置の語順、つまり、《случилось》(発生した) を《в Петербурге》(ペテルブルクで) の前に置く倒置語順をとったのであろうか。ここで注目すべきは、イントネーションと意味との関係である。このような部分的な倒置をとともなう文は、表現力の強い文 (экспрессивный вариант) となり、必ずふたつのシンタグマ、すなわち、ふたつのイントネーション的・意味的単一体に分割され、「そこでは、イントネーションの中心は、文全体の最初と最後の力点音節に置かれる」 [Там же: 203]。この法則にしたがえば、『鼻』の冒頭の文のシンタグマは、時間の限定詞《Марта двадцать пятого числа》(3月25日に) と倒置された述語《случилось》(発生した) との間でふたつに分割され、イントネーションの中心は《двадцать пятого числа》(25日) と《происшествие》(事件)

に置かれる。この部分倒置文は、読み手、すなわちテキストを朗読する聴き手の注意を「日付」と「奇妙な事件」に向けさせることになる。

そして、この部分的倒置語順によって、«*пятого числа случилось в Петербурге*» (25日にペテルブルクで発生した)の語句に、[п][т]+[ч]+[с][п]と[c][п]+[ч]+[п][т]という3組の子音の鏡像の組み合わせがもたらされているのである。中立語順では、この鏡像効果は得られない。

以上のように、部分的倒置語順と子音の鏡像現象からなるこの文は、奇妙で幻想的に響き、物語の冒頭から、事件が起こるペテルブルクという都市の両義的で幻想的な世界へ読者を引き込むのである。

以上考察してきたように、「黒い燕尾服」と「白いシャツ」の超近代的な医者、太鼓腹のパツューク同様、呪術治療師であり、パツュークが呪術治療師の明示的形象であるとすれば、医者、そのそれは半分隠された形象であること。医者、その形象の基にあるのは、悪魔的なものと人間的なもののほとんど隠された類似性であること。超近代的な医者によって行われる非近代的な呪術治療という両義性がモチーフとなっていること。一方、俗的で無知な床屋イヴァン・ヤーコヴレヴィチによって執り行われるパンを切る儀式は聖体礼儀であり、俗なる者による聖なる聖体礼儀という両義性がやはりモチーフとなっていること。医者によって行われる非近代的な呪術治療と、その反対に、無知で俗なる床屋による神聖な聖体礼儀は、両義性という意味においてもリズム・音のレベルにおいても互いに呼応し合っているばかりか、互いに正反対のふたつの儀式として対比されることによって、作品の構成上も歯車の凹凸のようにぴたりと噛み合っていること。そして、冒頭の一文は、通常の語順と異なる部分的な倒置語順をとり、音の鏡像現象を含んでいるために、奇妙で幻想的に響き、鼻失踪事件が起こったペテルブルクという都市の幻想性と両義性を象徴していることなどが明らかになった。これらすべてが相まって、ロシア帝国の政治的・文化的中心でありながら、同時にその地政学的周縁に置かれているというペテルブルクの両義性、「絢爛な都市にして哀れな都市」たる人工都市ペテルブルクの両義性を浮かび上がらせ、ペテルブルクの幻想性を一層際立たせ、そして、読者を、現実と幻想の境界が溶け合ったペテルブルクという両義的世界へと誘うのである。

Список использованной литературы

- Беловинский Л. В.* Энциклопедический словарь российской жизни и истории XVII–начала XX в., М., 2003.
- Будур Н.В.* Повседневная жизнь колдунов и знахарей в России XVIII-XIX веков. М., 2008.
- Вайскопф М.Я.* Сюжет Гоголя: Морфология, идеология, контекст. – М., 2002.
- Гоголь Н.В.* Сочинения Николая Гоголя. – Т. 3. – СПб., 1842.
- Даль В.И.* О повериях, суевериях и предрассудках русского народа. М, 1997.
- Дилакторская О.Г.* Фантастическое в повести Н.В. Гоголя «Нос» // Русская литература. Л.,1984. №1.
- Манн Ю. В.* Поэтика Гоголя. Вариации к теме. М., 1996.
- Русское народное поэтическое творчество / под ред. Н.И. Кравцова, М., 1971.
- Русская грамматика Т. 2 : Синтаксис. М., Академия наук СССР. 1980.
- Традиционный фольклор Новгородской области. Сказки. Легенды. Предания. Былички. Заговоры (по записям 1963-1999 г.). / Серия памятники русского фольклора. Выпуск II., СПб.,2001.
- 井上幸義「ゴーゴリの『鼻』における鼻失踪事件の日付と固有名詞の謎」『上智大学外国語学部紀要第44号』、2009年、219-242 ページ。